

『模倣の法則』におけるタルドの トクヴィル言及に関する覚書

Note on Tarde's Reference to Tocqueville
in *Les lois de l'imitation*

菊 谷 和 宏

Kazuhiro KIKUTANI

1. はじめに

ドゥルーズの弟子フィリップ・アリエズによる新しい全集の刊行に始まり、マウリツィオ・ラッツァラートによる現代社会への応用、ブルーノ・ラトゥールによる高い評価、そして我が国でも『模倣の法則』『社会法則／モノダ論と社会学』の立て続けの新邦訳出版など、近年世界のあちこちで「忘れられた社会学者」ガブリエル・タルドへの関心が高まり、その再評価が進んでいる。いわゆる「タルド・ルネサンス」だ。

本稿は、この世界的な研究の潮流に鑑みずかでもこれに寄与するために、タルドの議論の現代的意義を引き出すための一方法として、従来のタルド研究において顧みられることはほぼなかった、タルドのアレクシス・ドゥ・トクヴィルに対する言及に着目し、これを検討するものである。その際、主著でありまたトクヴィルに対する言及が最も豊富な『模倣の法則』を対象とする。

なお、本稿は今後展開されるべき本格的なタルド再検討の端緒を成すものであり、また和歌山大学経済学部設立60周年記念特集号への寄稿という特殊事情に伴う厳しい紙幅の制限もあり、どちらかといえば論理的分析よりも文献的事実の確定に重点が置かれる。

2. タルドによるトクヴィルへの言及

冒頭に置かれたジャン＝フィリップ・アントワヌによる論考を除いても新全集版で400ページに及ぶ大著『模倣の法則』（Tarde 1890）にあって、タルドによるトクヴィルへの言及はさほど多くはない。そこでまずは、単に名が挙げられている箇所を除く全言及箇所を『模倣の法則』内に現れる順に採録し、一つ一つ検討してみよう。⁽¹⁾

(1) この基準に基づいて本稿に採録されなかった言及箇所のページは以下の通り。Tarde 1890: pp.351-352=392-393頁, p.353=393頁, p.363=404頁。

I. 第六章「超論理的影響」第二節「上層から下層への模倣」IV（訳書では註24）より

トクヴィル（『アメリカのデモクラシー』）は「新聞の支配は人々が平等になればなるほど強力になってゆくに違いない」ということを鮮やかに示している。（Tarde 1890：p.283=333頁）

「さまざまな原因によってあらゆる階級同士の距離が接近し、最も低い階級の人間が最も高い階級の人間を外的に模倣できるような時代を、我々は民主主義的と形容している。したがって、どのような民主主義体制においても、そこでは現代と同様に内的・外的な同化に対する熱望が強まっており、世襲や淘汰を通じて優等者たちによる社会的ヒエラルキーができているか、あるいはできつつあると確信することができる」（*ibid.*：p.282=310頁：強調原文）とのタルドによる民主主義観に従って、貴族制社会の上流階級が、ジャーナリストら新興の人々によって置き換えられたとの箇所につけられた註である。

これ以上の分析はおこなわれていないためこの引用箇所でタルドとトクヴィルについて深く論じることには無理があるが、次の引用箇所Ⅱを考え合わせれば、民主主義社会における模倣による平等拡大の、したがって（この点はトクヴィルとは異なり）支配層の願望や意志浸透の重要な形態として「新聞（今日的にはマスコミ全般であろう）」を捉えているのだと考えられる。

なお、ここでタルドが念頭に置いているトクヴィルの記述は『アメリカのデモクラシー』（第一巻＝Tocqueville 1835, 第二巻＝Tocqueville 1840）第二巻第二部第六章「結社と新聞の関係について」であると思われる。ただし、タルドはトクヴィルの原文を必ずしも忠実には引用せず、また出典の著作名もページも記さないため、その出典は我々読者がそれらしい文章・内容をトクヴィルの諸著作の中に探し当てるしかない。この点、本稿で以下検討する他の引用箇所についても同様である。ご留意いただきたい。

II. 第六章「超論理的影響」第二節「上層から下層への模倣」IVより

民主主義諸国では、トクヴィルの次のような指摘の通り、首都だけでなく多数者も威信を持っている。「市民がより平等になり、より類似した存在になるに従って、ある一人の人間や階級を盲目的に信じる傾向は弱まってゆく。[その反対に、] 大衆を信じようとする傾向が増大してゆき、次第に世論が人々を導くようになってゆく」——大衆（la masse）や多数者（la majorité）が真の政治的権力になり、その優位性がすべての人々に認められると、我々はかつて君主や貴族の威信に従っていたのと同じ理由から、大衆や多数者の威信に従うことになる。しかし、トクヴィルはもう一つ別の理由も挙げている。「平等の時代にお

いては、人々は互いに類似しているからこそ、互いに信頼し合うことはない。しかし、この同じ類似性によって、人々は公衆の判断に対しほとんど無制限の信頼を抱くようになる。というのも、すべての人々が同じような知性を持っているので、真実が最大多数の側に見出されないなどということはおよそありそうもないように思われるからである」。これは一見すると、論理的で数学的に正しい考えであるように思われる。つまり、もし人間が相似的な単位であるならば、この単位の最大数が正しいことになるだろう。しかし実際には、このような考え方は、模倣がそこで果たしている役割を完全に無視することに基づいた妄想にほかならない。

ある理念が投票で圧勝した時、もしその得票数のうちの99.9%が単なる真似に過ぎないとしたら、誰もその理念に従おうとは思わなくなるだろう。最も信頼にたる歴史家たちでさえ、いつもこの点を見落としている。指導者たちによって吹き込まれた何らかの大衆的な願望（*vœux populaires*）に魅了され、全員一致でその願望を抱くようになった民衆（*le peuple*）を前にして、歴史家たちもまた群衆（*la foule*）と同じく、奇跡を目の当たりにしているかのように幻惑されてしまうものである。全員一致というものは警戒しなければならない。これ以上に模倣が持つ誘惑の強さを示すものはないからである。

平等の進展さえも模倣によって、つまり上流階級を模倣することによっておこなわれる。（*ibid.*：pp.287-288=314-315頁：強調原文）

ここでのトクヴィルの引用（『アメリカのデモクラシー』第二巻第一部第二章より）の仕方は、正確ではあれ、公平であるとは言えないだろう。実際のところ、自らの模倣理論による事態の説明のために、著名なトクヴィルを引き合いに出しているだけで、議論はかみ合っていない。

にもかかわらず、ここにはトクヴィルとタルドの本質的な違いを既に垣間見させるものがある。即ち、平等の進展を本質的には神の摂理と捉え、その進展は全面的で不可避であると考えたトクヴィルに対し、これをむしろ模倣の拡大であるとしてそのメカニズムを解明しようとしたタルドの立場は、平等の進展を必然ではなく、社会体制の変化・変更によって修正・停止・逆行可能な「社会現象」「社会的事実」として捉えることにつながる。

この点で、タルドはトクヴィルよりも世俗的・科学的であり、デュルケム社会学と共に、十九世紀末というその時代性を（良い意味で）感じさせるものである。⁽²⁾

また、タルドのこの解釈に従えば、トクヴィルの有名な指摘である民主主義社会における「多数者の暴政」とは、実は上流階級の支配者の模倣であり、結局むしろ社会の上層の支配者の願望や意志の浸透に過ぎないことになる。この点はトクヴィルに発する民主主義社会研

（2）トクヴィルとデュルケムの時代と世俗性・科学性については、拙著菊谷2005を参照されたい。

究の観点からは——現代社会の強いポピュリズム的傾向を目の当たりにすれば、とりわけ——今後の研究の発展につながる興味深い視点であると言えるだろう。

Ⅲ. 第七章「超論理的影響（続）」第一節「言語」より

……英語であれ他の言語であれ、一つの言語が普遍的な母国語となる日が来ることだろう。その時には、この言語によって……人類社会は同じ一つの社会家族へと融合されるだろう（*confondra en une même famille sociale tout le humain*）。

これと同じような事実は、大小さまざまな国家の中で個別に観察される。トクヴィルの正当な指摘によれば、貴族社会において——知っての通りそこではすべてが世襲的で慣習的である——各階級は、それぞれ独自の習慣を持っていただけではなく、共通語から区別された独自の言語さえ持っていた。「各階級が好んで用いていたいくつかの言葉は、遺産と同じように世代を通じて伝えられた。その時代には、同じ意味であっても、貧困層の言語と富裕層の言語、庶民の言語と貴族の言語、学問的言語と通俗の言語では異なった言語表現が使用されていた」。付言すれば、そこには神聖な言語と卑俗な言語、さらに儀礼言語と日常言語も含まれる。——これと反対に「人々がもはや地位に固執しなくなり、絶えず出会い、交流する時」、即ち流行模倣（*l'imitation-mode*）が目に見えて活発になる時、「言語のあらゆる言葉が混じり合い、方言が消滅する。そして合衆国に方言は見られない」。

（*ibid.*：p.314=352 頁：強調原文）

自らの模倣理論を古代から現代に至る言語の発生と普及の歴史に当てはめた箇所である（出典は『アメリカのデモクラシー』第二巻第一部第十六章）。ある種スペンサーに似た思考・記述パターン、即ち一つの抽象化された原理——スペンサーの場合は「進化」、タルドは「模倣」——を観察されるあらゆる現象にほとんど無差別に、アナロジーをもって適用するというパターンが顕著に見られ、故にまた厳密な適用根拠や論理を欠いた、かなり曖昧なユートピア思想になっている。さらに、この箇所でトクヴィルを引き合いに出す必要が——「箔を付ける」以外に——あるとも思えないが、これまで我々が検討した引用箇所ⅠおよびⅡを考え合わせると、タルドは、そのメカニズムについては批判的であってもトクヴィルが指摘する社会現象・社会的事実それ自体には好意的なように思われる。換言すれば、タルドにとってトクヴィルは「現実を見抜く鋭い目を持っていたものの、その現実の原因の分析は不十分である」といったところなのかもしれない。

IV. 第七章「超論理的影響（続）」第三節「統治」より

トクヴィルとスペンサーは、現代においてゆっくりと、しかし抗い難く迫り来る大きな社会変動の波を感じ取っていた。彼らはそれぞれこれを言葉でもって定式化しようと研究し、それぞれ歴史の一般法則を見出したと信じた。スペンサーが特に驚いたのは、我々の時代の産業の発展であった。彼はこれを支配的特徴と認め、これが現代社会の他のあらゆる特徴を説明すると考えた。この特徴とは、とりわけ個人の解放であり、即ち自然的権利から制度的権利への、身分から契約への、特権から正義への、世襲あるいは国家によって強制された同業団体（corporation）から自由で自発的な結社（association）への置き換えである。彼はこの観点を一般化して、略奪と生産、あるいは戦争と平和という活動区分は、永遠に対立する二つの主要な文明タイプを十分に特徴付けると考えた。即ち一方は隣人の殺戮を望む軍事的タイプ、他方は平和、自由、道徳性、愛に満ちた純朴で雄大な未来を望む産業的タイプである。

トクヴィル自身が語るところによれば、彼は諸条件の平準化がヨーロッパでもアメリカでも人民を不可避的に民主主義へと突進させていることに、深く宗教的な感銘を受けた。彼の目から見れば、特権の欲求が過去における最強の原動力だったのと同様、平等の欲求は現代における最強の原動力である。彼は、この二つの力の対立から、貴族的社会と民主的社会を対比した。そして、あらゆる時代のあらゆる事柄が、つまり政治のみならず、言語、宗教、産業、文学、芸術といった事柄が、この二つの社会によって区分されると考えたのである。彼は怖れるどころか、その反対に一種のあからさまな共感を示しつつ、しかもスペンサーのように過度に楽観的な幻想に浸ることもなく、未来の民主主義において平等化が完遂された結果を予測して、それを予言絵巻のあちこちで繰り広げたのである。

スペンサーの対概念とトクヴィルのそれは、多くの点で並行し一致している。というのも、スペンサーが適切にも「軍事的」と呼んだ社会はトクヴィルが「貴族的」と呼んだ社会を指しているし、さらにスペンサーが「産業的」と呼んだ社会はトクヴィルが「民主的」と呼んだ社会に接近していると思われるからだ。しかしスペンサーの方は、軍事主義は行政機能の集中によって義務的協力と個人の抑圧を生み、産業主義は行政機能の分散によって自発的な協力と個人の独立を生むと主張する。トクヴィルの方は、彼の博識が最も思慮深く誠実な洞察に結び付いた数ページの中で、最終的には彼自身の期待に反して次のように考えざるをえないと述べる。つまり、スペンサーとは逆に、全般的な均一性（uniformité générale）から生じる民主主義的平等というのは、ほとんど宿命的に過度に規範的で抑圧的な中央集権化へと我々を導くだろうし、さらに地域的な特権、個人的な保証といったものは、多様で不平等な貴族主義の時代の方がはるかに守られていたのだ、と。このトクヴィルの告白は、彼自身にとって非常に辛かったはずだ。一体どのようにして彼は、自らの平

等への愛をはるかに凌ぐほど情熱的な自由への愛を、順応主義的で不寛容な社会状態、つまり彼がはっきりと予見した社会主義的な社会状態と和解させたのか、私にはわからない。しかも彼の自由主義は、先の英国の偉大な進化主義者〔スペンサー〕ほど一貫性の高いものではないのだ。いずれにしても、ここでは両者のいずれが正しいのだろうか？

我々はトクヴィルに賛成して、貴族主義体制は分権的・分化的で、ある意味では自由主義的であり、民主主義体制は集権的で平等主義的・権威主義的であると考えべきなのだろうか？ それともスペンサーに賛同して、トクヴィルとは反対の説を採用すべきなのだろうか？

私の考えでは、トクヴィルの説の方がより多くの真実を含んでいるけれども、ある思想的側面を明確にしなかった点で誤りを犯している。その側面は、彼の思想では曖昧なままなのである。実のところ、彼の言う貴族的体制とは、大抵の場合習慣支配のことを意味しており、民主的体制は流行支配のことを意味している。もし私が述べたような仕方では彼が自分の思想を表現したならば、彼は議論の余地のない正確さでそうしたことだろう。しかし、彼が実際に用いた表現は不正確であった。というのも、伝統の精神と結び付くことは貴族主義にとって本質的な事柄ではないし、またあらゆる民主主義が新しいものを歓待するわけではないからである。にもかかわらずトクヴィルが優れているのは、彼が権力、権利、感情、観念の起源が世襲的であるかそれとも非世襲的であるかの区別が重要であることを見落とさなかったことにある。これはスペンサーにあってはまったく無視されるか、あるいはわずかに触れられるに過ぎない点である。(ibid. : pp.357-360=399-402 頁)

『模倣の法則』の中で、次の引用箇所と並び、トクヴィルについて最も多く論じられている箇所である。そこでは、トクヴィルの社会理論をスペンサーのそれと対比させ比較しつつ、それらの特徴があぶり出される。両者とも歴史の流れの中で社会の型を、それぞれ「軍事的・産業的」「貴族的・民主的」と二つに分けた。これらの対概念は類似点も多いものの、その帰結という点で決定的に異なる。即ち、トクヴィルによれば、民主主義体制は集権的で平等主義的かつ権威主義的な社会をもたらし、これに比すれば（かつての）貴族主義体制の方が分権的・分化的であり、ある意味ではより自由主義的である。スペンサーはこの逆の帰結を予見する。

トクヴィル研究の立場からすれば、「全般的な均一性から生じる民主主義的平等というのは、ほとんど宿命的に過度に規範的で抑圧的な中央集権化へと我々を導く」とまでは言えないだろう。トクヴィルは諸条件の平準化即ち平等の進展・民主主義の進展自体は不可避であると考えていたが、それがいわゆる多数者の暴政に必ず帰結するとは考えていない。そのような帰結に至るのはこれに抗する要素をその社会が欠いている場合である。⁽³⁾

また、トクヴィルが「諸条件の平準化の普遍的な進展に深く宗教的な感銘を受けた」とい

う指摘は——現代の政治学的トクヴィル研究ではしばしば軽視されるものの——まったく正しい理解であると思われる。⁽⁴⁾さらに「諸条件の平準化即ち平等の進展という歴史的社会的事実を、平等への欲求の発露によるものと捉え、なおかつこの欲求を現代最強の原動力と考えた」とするトクヴィル解釈も、差し当たり正しいだろう。タルドが参照した節はないが、『回想録』（Tocqueville 1851）にはこの見方を支持すると思われる記述が見られる。⁽⁵⁾

いずれにせよ、「トクヴィルの指摘を高く評価するものの、同時にその不十分さを批判し、これを自前の諸概念（ここでは習慣支配と流行支配の概念）に当てはめることでトクヴィルの議論を補足しより精緻なものに仕上げようとする」スタンスはここでも変わらない。

なお、タルドがスペンサーよりもトクヴィルを評価する根拠の一つに挙げている「世襲と非世襲の区別の重要性の認識」については、下記引用箇所VIで触れられる。

V. 第七章「超論理的影響（続）」第三節「統治」末尾より

……現代社会は常に留まることなく変化していて、一時的に個人の自由というものを愛好している……が、その向かう先にあるのは、現在進行中の普遍的な均一化（uniformisation universelle）という作業が完遂され、慣習が固定化しきった時代である。トクヴィルは彼の著書の最終部分でそのような予感を抱いた。ひとたび民主的な状態が樹立されると、人々はもはや革命を好むどころか、その反対になると彼は述べ、さらにこう付け加える。「私が推測するところでは、ある国家が平等主義を取り入れると、その社会はこれまでの西洋社会にはなかったほどの静止状態へと向かう」。

（以下、直後に付けられた脚註。訳書では註29。）

トクヴィルの著作を注意深く読んだ人は、次のことに気付くだろう。トクヴィルは模倣の原理をわざわざ定式化することはなかったが、いつも彼はそれに近いことをしつつ、奇妙なことにその結果を列挙するだけなのである。しかし、もしトクヴィルが模倣の原理を明確に示し、しかもそれを直ちに彼の推論に用いたとしたら、彼は誤りや細部の矛盾を避けられただろうと思われる。彼は正しくも次のことを指摘している。「似通った信仰を持たずに繁栄する社会は存在しない。というよりも、そのような信仰なくして存続する社会というものは存在しないのである。なぜなら、共通の思想なしにはいかなる共通の行動もありえず、そして共通の行動なしには人間たちは存在しても社会体は存在しないからである」。

このことが根本的に意味しているのは、真の社会関係は模倣から構成されているという

✓（3）Tocqueville 1835 第一巻第二部第七章および第八章。中でも同書 pp.263-264&273-288=150&166-191 頁。

（4）拙著菊谷2005第一章第二節を参照されたい。

（5）拙著菊谷2005第一章第三節を参照されたい。

ことである。というのも、思想の類似性とは（ここで私が述べているのは社会が必要とする思想のことである）、先天的に内在するものではなくて、後天的に獲得されるものだからである。トクヴィルが多数者の全能——未来の恐るべき問題となろう——を正しく説明し、また民主主義状態における大衆世論の特異な力を、つまり全員の精神が各人の精神に対して行使する「巨大な圧力」を正しく説明するのは、平等性によってである。他方で彼はこの平等性を類似によって説明するが、実を言えば、それは単なる一側面に過ぎない。人々がある程度まで互いに似てくる時にだけ、人々は互いに同一の権利を認めるようになる、と彼は述べる。ここに何を付け加えるべきだろう？ それはただ一言、しかし不可欠な次の一言である。人々が生まれながらに持っていたわけではまったくないこの類似性を作り上げた（あるいは作り上げたに違いない）のは模倣である、と。したがって模倣はまさしく固有の社会的行為であり、すべてはそこに由来するのである。

トクヴィルはさらに述べる。「民主主義の世紀においては、人間たちの極端な流動性と忍耐を知らぬ欲求が、絶えず彼らのある場所から別の場所へと動かしており、またさまざまな国の住民を互いに混ぜ合わせ、出会わせ、語り合わせ、取り入れ合わせている。そのため単に一民族の成員たちが類似した存在になるだけではなく、諸民族が同化されるのである」。民主主義革命という言葉では、卓越した流行模倣の効果をうまく描き出すことはできないだろう。一般的かつ抽象的な観念へと向かう民主主義の傾向が、生きた現実を見る目を人々から奪っていることを、彼は巧妙に、そして確実に説明していると私は思う。つまり人々は互いに似てくれば似てくるほど、彼らは自分たちを簡単に塊（masse）と見做し、総計と見做すようになり、何もかもそのように眺めることが習慣となる。さらに、[トクヴィルの指摘する]次の事態も模倣の効果である……。「同一の政府の下で膨大な数の市民が維持されているからといって、それは団結して暮らしたいという合理的な欲求によるものではまずない。それよりもずっと、感情の類似と意見の類似に由来するある種の無意識的なもの、つまり本能的な合意（accord instinctif）によるものなのである」。（*ibid.*: pp.364-365=405-406&471-472 頁）

出典は引用順に、『アメリカのデモクラシー』第二巻第三部第二十一章、第二巻第一部第二章、第二巻第一部第十七章、第一巻第二部第十章である。いずれもほぼ原文通りに引用されている。

この箇所には注目すべき点はいくつかあるが、中でも重要なことは、トクヴィルがその真因・メカニズムを明確には示さなかった、というよりも宗教的な感銘をもって「人智を超えた避け難い神の摂理」と見做し、自らの議論の大前提とした「平等性の拡大」、「人々の類似性の歴史的増大」つまり「民主主義の進展」を、「模倣」という「まさしく固有の社会的行為」の結果であるとした点である。換言すれば、それなくしては社会体が存続できない「信

仰」を、「模倣」によって置き換えようとしている点である。つまり、ここでタルドは、民主主義の進展を、神的な超越性ではなく、社会的な要因によって根拠付けようとしているのだ（それが学問的に成功しているかどうかは、ともかくとして。またトクヴィル解釈として正確か否かについても、ともかくとして）。

だからこそ、タルドによってトクヴィルの議論は、社会的に説明すべきことをそのように説明せず、超越性の領域にいわば「棚上げ」してしまったように見え、ただ一言の、しかし不可欠な付け加えが必要な——引用箇所ⅢおよびⅣのコメントで触れたのと同様——不十分なものに映っているのだ。

そしてもちろん、このようなタルドの社会科学的な態度は、引用箇所Ⅱで垣間見られたのと同じ、論敵デュルケームと、しかし共通する態度である。

Ⅵ. 第八章「考察と結論」第二節より

トクヴィルは貴族的体制から平等主義的体制への移行が不可逆的なものであると確信し、平等な社会において何らかの貴族制が形成されるような可能性を否定している。しかし、この点はよく考える必要がある。既に知られた原因によって社会がさらに同化され、類似が蓄積され続けたとしても、だからといってその社会がより平等化されるとは限らないのだ。というのも、模倣的同化は社会を作り上げる素材に過ぎないからである。この素材を切り分け、利用するのは社会論理である。それこそは、専門化した能力とそれら相互の協力によって、そして専門化した知性とそれら相互の承認によって、最も強固な統一を目指そうとするものである。したがって、一つの強力なヒエラルキーがあらゆる文明にとって避けられない最終目標であるという考えも、それなりに正しいかもしれない、あるいはその通りかもしれないのだ。といっても、その文明が完成して最終ゴールに達したと認められるのは、同一の権力や富とは言わないまでも、同一の欲求や同一の思想が全市民に普及した時のことである。しかし、それでもトクヴィルに同意できる点がある。それは、ある国において血縁的世襲の威光に基づく貴族制が崩壊したら、その国でそれが復活することは決してないということである。実際、普遍的反復の社会的形態である模倣は、その生物的形態である遺伝から次第に解放される傾向にあることを既に我々は知っているのである。（*ibid.* : pp.440-441=501-502 頁）

引用箇所Ⅱに対するコメントで指摘した点がここで具体的に論じられている。つまり、「貴族的体制から平等主義的体制への移行」を本質的には神の摂理と捉え、その進展は全面的であり不可避であると捉えたトクヴィルに対し、これをむしろ模倣の拡大であるとしてそのメカニズムを解明したタルドは、平等の進展を、必然ではなく、したがって不可逆な事実

ではないと考えるに至った。そしてさらには、社会現象における模倣が、生物学的事実としての遺伝から解放されてゆくこともここで指摘されている。

このことは即ち、これまでの引用箇所で言語や民主主義化などが挙げられてきた社会現象が、トクヴィルの場合のように一定程度神的超越的事実ではなく、かつまた形而下の事実であるとはいえず社会的ではない生物学的事実にでもなく、まさしく固有の意味での「模倣」という社会的事実そのものによって説明されることを意味している。

この点で再び、デュルケームと共に十九世紀末を生きたタルドは、同世紀前半～中盤を生きたトクヴィルよりも世俗的・科学的であるのだ。⁽⁶⁾

3. 仮のまとめ——タルドの過渡的時代性

以下、タルド再評価の次なる段階へ向けて、本稿で得た知見を、『模倣の法則』の他所も参照しつつ、簡単にまとめよう。

ロラン・ミュキエリが指摘する通り (Mucchielli 2000)、タルド (1843-1904) は徹頭徹尾十九世紀の思想家だという点にはまったく同意する。彼の著作は、対象をあまりにもおおざっぱに捉えその具体的な性質を大きく無視した定式化においてオーギュスト・コント⁽⁷⁾ (1798-1857) を、また自らが唱える一般概念「模倣」の、多様な対象に対するあまりにも奔放な適応においてハーバート・スペンサー (1820-1903) (とその「進化」概念) を思わせる (事実、既に我々も確認した通り、また他所においても、スペンサーはしばしば参照される)。

ただ、タルドの十九世紀性はしかし、いわば十九世紀末性を大きく含んでいるようにも思われる。つまり、確かに上述の諸点でコントやスペンサーの同類であるとしても、さらに十

(6) 紙幅の都合上本文に入れられなかったが、以下のような——原意を損なっており不適切な——引用箇所もある。

「慣習が支配する時代は……その慣習は世代を通じて維持される。……しかしその後……流行が毎年変化するような時代になると、製品の質ではなく量を追求することが産業の目的になる。アメリカの貨物船製造業者の一人がトクヴィルに語ったところによれば、貨物船の流行があまりに度々変わるので、彼は耐久性の低い船を造る方が利口だと思えるようになったという」(Tarde 1890 : p.389=431 頁)。

この話は『アメリカのデモクラシー』第二巻第一部第八章末にある。正確な文章は次の通り。

「あるアメリカの船員に出会い、彼の国の船はどうして長持ちしないように造られているのかと尋ねたことがある。すると、彼はためらうことなく、航海術が日々急激に進歩しているので、最上の船でも数年も使えばほとんど使いものにならなくなるだろうと答えた」(Tocqueville 1840 : p.40= 上 66 頁)。

比較すれば直ちにわかる通り、トクヴィルはここで「船の流行」ではなく「航海術の進歩」の話をしている。また当該章は全体として、民主主義における「移ろい易い流行」ではなく「人間の完成可能性の無限追求」について論じている。「造船業者」か「船員」か——原語は *matelot* ——という単純な思い違いを措いたとしてもなお、タルドの引用は明らかに不適切である。

(7) 例えば、「波動」「生殖」「模倣」という基体を異にするまったく異質な現象を、同じ一つの「普遍的反復」の三つの現れ(「物理的反復」「遺伝的反復」「社会的反復」)としてまとめて論じる点など(『模倣の法則』第一章)。

九世紀後半～末を生きた人間として、タルドは徹頭徹尾世俗的であり、この点ではエミール・デュルケーム（1858-1917）と共通の時代性を持っている。対して、同じ十九世紀を生きたとはいえもっぱらその前半～中盤を生きたトクヴィル（1805-1859）は、カトリシズムをバックボーンとして持ち、次第にそこを脱しつつあったとはいえ、「社会」を論じる際にも超越性のいくばくかを保持している。

したがって、超越性の全面排除という点において、つまりは実証主義の採用という点においてタルドはデュルケームと同類であり、トクヴィルとは異質であると言い得よう——タルドがトクヴィルを高く評価しようとも。実際、タルドは、キリスト教、イスラム教、人民主権、社会契約、そして社会主義を同列に並べ、これらある一人の人間が取り憑かれた「幻想」の伝播・浸透を、自らの模倣理論によって等しく説明することを試みている（Tarde 1890：pp.89-90=63頁）。

このような思想史的観点から見れば、前節末で見た通り、タルドの主張する「模倣」概念も、超越性を排した上での社会の理解・説明の一つの挑戦として捉えることができるだろう。つまり、この世界を、超越性に最終的に根拠付けられる世界ではなく、人間が相互に織り成すネットワークであり、それ以上でも以下でもない「社会」として理解し尽くし説明し尽くそうという、まさしく社会科学的な挑戦である。

ただし彼の言う模倣は、（意識的・意図的な）「真似」ではなく、「一つの脳から別の脳への、脳内の観念や欲求の転写」（*ibid.*：p.262=286頁）、「心理的感電」（*ibid.*）ないし「催眠暗示」（*ibid.*）であって、つまりいわば（無意識的な）「反復」であり、通常用いられる意味とは大きく異なっている点には注意が必要であろう。しかし、だとしても、先に指摘した意味でのその社会科学性が減じられるものではない。

結局のところ、思想史はトクヴィル～タルド～デュルケームと動いてゆくが、タルドはまさにこの両者の特徴を重ねて持っているのだ。メタファーとアナロジーの十九世紀前半～中盤の思考様式と実証主義的科学主義の十九世紀末～二十世紀初頭の思考様式の両方を。

【付記】

本稿は和歌山大学経済学部研修専念制度に基づく研究成果の一部である。

【参考文献】（ただし訳文は適宜変更した。）

- 菊谷和宏 2005 『トクヴィルとデュルケーム — 社会学的人間観と生の意味』、東信堂。
——— 2008 「共に生きるという自由について（上・下） — 生の社会学への展望：トクヴィル、デュルケーム、ベルクソン」、『思想』、第1010号・第1011号、岩波書店：35-55・148-181。
Mucchielli, Laurent 2000 “Tardomania? Réflexions sur les usages contemporains de Tarde”, *Revue d'histoire des sciences humaines* 3 : 161-184。
Tarde, Jean-Gabriel 1890 *Les lois de l'imitation* (Œuvres de Gabriel Tarde sous la direction d'Eric Alliez 2°

série Vol.1), *Les empêcheurs de penser en rond*=2007 池田祥英・村澤真保呂訳『模倣の法則』, 河出書房新社.

———— 1893 *Monadologie et sociologie* (Œuvres de Gabriel Tarde sous la direction d'Eric Alliez 1^{ère} série Vol.1), *Les empêcheurs de penser en rond*=2008 村澤真保呂・信友建志訳『社会法則／モノダ論と社会学』, 河出書房新社.

———— 1898 *Les lois sociales* (Œuvres de Gabriel Tarde sous la direction d'Eric Alliez 1^{ère} série Vol.4), *Les empêcheurs de penser en rond*=2008 村澤真保呂・信友建志訳『社会法則／モノダ論と社会学』, 河出書房新社.

Tocqueville, Alexis de 1835 *De la démocratie en Amérique* I (Œuvres complètes tome I・1), Gallimard=2005 松本礼二訳『アメリカのデモクラシー』第一卷(上・下), 岩波書店(岩波文庫).

———— 1840 *De la démocratie en Amérique* II (Œuvres complètes tome I・2), Gallimard=2008 松本礼二訳『アメリカのデモクラシー』第二卷(上・下), 岩波書店(岩波文庫).

———— 1851 *Souvenirs* (Œuvres complètes tome XII), Gallimard=1988 喜安朗訳『フランス二月革命の日々: トクヴィル回想録』, 岩波書店(岩波文庫).

———— 1856 *L'Ancien régime et la révolution* (Œuvres complètes tome II・1), Gallimard=1998 小山勉訳『旧体制と大革命』, 筑摩書房(ちくま学芸文庫).